

## 序 問題の所在

「黒ノート」が、2014年春の公刊以来、厳密には公刊直前から、反ユダヤ主義的発言によってセンセーションを引き起こしてきたことは、記憶に新しい。しかしもちろん、「黒ノート」の主題は反ユダヤ主義だけではない。全集版でようやく5巻目が公刊された今、「黒ノート」の全貌を明らかにするにはなお時間を要するとしても、『有と時 [存在と時間]』に対するかなり早い時期での自己批判をはじめ、このノートが、従来最も問題視されてきた1930年代初めから40年代にかけてのハイデガーの思索を跡づけてゆくうえで、第一級の資料であることは言を俟たない。膨大な断章から成るテキストの性格を言い表すのはきわめて困難だが、一つ言えることとして、「黒ノート」の断章には、従来の公刊テキストのあちこちに点在している記述を相互に関連づけ、あるいは補強することで、ハイデガーの思索における統一的な主題としての性格を明らかにしてくれるものがある、ということである。

そのような主題の一つに、「悲劇」を挙げることができるであろう。周知のようにハイデガーは、1930年代の半ば以降本格的な対話の相手となるヘルダーリンの影響のもと、ソポクレス悲劇、とりわけ『アンティゴネー』と『オイディプス王』に強い関心を向けるようになる。作品全体を扱うものでないにせよ、独自の洞察が思索の展開を特徴づけてゆく。その意味では、ハイデガーにとってギリシア悲劇は、ヘルダーリン同様、端的にソポクレスであった。

しかし他方、われわれは、悪名高い学長就任演説「ドイツの大学の自己主張」（以下「自己主張」と略記）において、別の悲劇詩人アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』の一詩句が取り上げられているのを知っている。もっとも、テキストの問題的性格のためか、プロメテウスについてのわずかな言及がより広い文脈で取り上げられることは、ほとんどなかった。まして、アイスキュロスとソポクレスの連関が問われることもなかった。それゆえ、この時期のハイデガーが何故にギリシア悲劇なのかということも、明らかにされたとは言い難い。

このような状況のなか、「黒ノート」は、アイスキュロスやソポクレスについても、これまで知られていたより早い時期の言及を示すこととなった<sup>1</sup>。たしかにその言及は、他の公刊テキスト同様、断片的である。しかし、それらは、他のテキストの言及と響き合い、ギリシア悲劇に向かったハイデガーの思想的地盤を照らし出すように思われる。

本発表の意図は、以上の事情を踏まえ、「ハイデガーとギリシア悲劇」という主題を目標に、アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』をめぐるハイデガーの立場について考察を試みることである。このテキストを取り上げるのは、管見のかぎり、ソポクレスの二作品に比して<sup>2</sup>、ほとんどその考察が見出せないからであるが、それ以上に、この作品に対する言及を検討することで、1930年代のハイデガーの立場を明らかにすることができると思われるからである。

以下では、ギリシア悲劇への関心が1930年代の早い時期から動いていることを「黒ノート」の記述で確認し、次いで「黒ノート」、「自己主張」、『省慮 (Besinnung)』の3つのテキストをもとに、プロメテウス解釈を順次考察する。最後に、ハイデガーにとってのプロメテウスの位置づけについて一言付け加えるとともに、本主題の射程を述べて、論を締め括ることとする。

## 1. 悲劇への洞察と原初としてのプロメテウス — 「黒ノート」における

「自己主張」が、プラトンの『国家』第6巻の一節、「すべて偉大なものは、嵐の中に立っている…」(Politeia, 497d, 9)で締め括られていることは、よく知られている。しかし、その同じ文言が、それよりも早く、「黒ノート」第一の「目配せ×考察(Ⅱ)と指示」の断章178に、ギリシア語原文と共に、「すべて偉大なものは、嵐の中にぐらつき揺れ動きながら立っている。美は困難である」(GA94, 72)というように引かれている。そしてそれに続けて、「後者は古い箴言(ソロン?)であり、これは前者とともにギリシア人の全体的本質を言い表している。両者は、デイノンの内に集められる(ソポクレスのアンティゴネーを参照)」(ibid.)と記されているのである。この箴言から経験される「原初の気分」が「覆蔵された深い悲しみ」(ibid.)とされていることも興味深い。今はただ、後に扱われることになる『アンティゴネー』の合唱歌、通称「人間讃歌」における「デイノン」に重い位置づけが与えられていることに注意しておきたい。この語は、1932年秋に書き始められた第二のノート「考察と目配せⅢ」の断章5では、「ドイツ人の偉大さが持つ究極の運命のデイノテース」(GA94, 110)という形で見出される。デイノンの語を「無気味な(unheimlich)」と訳すハイデガーにとって<sup>3</sup>、デイノテースは「無気味さ」となるが、それがドイツ人の運命(Schicksal)と結びつけられていることが重要である。と言うのも、このノートは学長就任時期のものであり、後で見るように、「自己主張」ではまさしく「ドイツ民族の運命」が語り出されるからである。

以上から、「黒ノート」の執筆が始まった1930年代初め、既にギリシア悲劇への関心が動いていたことは確認できたであろう。そしてその関心を映すかのように、デイノンへの言及に程近い断章219に、プロメテウスの名前がアイスキュロスの名前とともに現われるのである。その断章は、「プロメテウス(アイスキュロス)と哲学の原初」、「原初と世界の性起(Weltreignis)」、「世界の性起と人間的現有」、「現有の歴史と有の本質歪曲(Verwesung)」というように、四つの対句が並べられただけの構成だが、各対句の後の語が次の対句の前に配されており、全体が一つの連関を成しているのは明らかである。ただし、それが閉じられることなく、プロメテウスから有の本質歪曲に向かっていることにも意味があると思われる。

最初に押えるべきは、プロメテウスが、ギリシア神話上の一般的な名称ではなく、アイスキュロス悲劇のプロメテウスであることである。周知のように、プロメテウスについての最古の伝承はヘシオドスの『神統記』と『仕事と日』であるが、ハイデガーが取り上げたのは、アイスキュロス悲劇であった。この悲劇で初めて語り出されたのは、火と技術の結びつきである<sup>4</sup>。すなわち、ゼウスを欺いて天上から火を盗み出し人間に与えたという基本モチーフに、技術という知の契機を導入し、人間は火から技術を学び知るということを描いたのがアイスキュロスであった。この「火と技術」というモチーフに対するハイデガーの立場については、次章以降の考察を待つことになるが、ここではまず、アイスキュロスのプロメテウスが哲学の原初と結びつけられていることを確認しておこう。ハイデガーが原初の思索者と呼ぶのは、アナクシマンドロス、ヘラクレイトス、パルメニデスの三者であるから、アイスキュロスは広い意味で彼らと同時代人である。しかし、それだけで「哲学の原初」となるわけではない。この断章にもその前後にも、原初との関係を直接に示す記述はない。後で見るように、上記「火と技術」のモチーフは、プロメテウスを原初と結びつける重要な要素となるのだが、ここでは別の観点を提示したい。それは、このノートと同時期、1931/32年の冬学期講義「原初 アナクシマン

ドロスの「講義のための草稿とメモ」に、アナクシマンドロスの箴言に現われる「ディケー」との連関で『縛られたプロメテウス』に言及されていることである。

ハイデガーは、ディケーの語を「正義」と訳して直ちに法律的・道徳的に捉えることをいましめ、「正当さ (Fug)」という訳語を与え、同じ語源の語「接合する (fügen)」との連関で捉えようとする。ハイデガーによれば、アナクシマンドロスにおけるディケーとは、昼と夜、誕生と死のように、2つの事柄が相互に接ぎ合わされることで成り立つ構造・秩序であり、その接合の正当さである。そのようなディケーの例として、ハイデガーは、『縛られたプロメテウス』の第9行と第30行に言及する。二箇所とも、プロメテウスがゼウスに背いて人間に火を与えた行為に関わるものである<sup>5</sup>。前者では、その行為によって神と人間との相互に接ぎ合わされるべき正当さが破られたため、元通りに接ぎ合わせることが償いとして解され、後者では、その行為が神と人間との正当さを踏み越えていることと解されている。いずれでも用いられている語はディケーだけだが、アナクシマンドロスの箴言では対立語アディキアーも用いられているから、プロメテウスの行為は接合の正当さを踏み越えた「不正当さ (Unfug)」となる。詳論は差し控えざるを得ないが、ハイデガーはこの時期以降、「正当さ」の語とともに「接合」を軸とする一連の関連語を導入して、思索の要に据えてくる<sup>6</sup>。次の「自己主張」でも、「遥かな [接合の] 指図 (Verfügung)」という語を原初との連関で捉えることになる。したがって、ディケーがアディキアーとの境界を含めて動的に捉えられること、それが事柄の持つ接合構造において語られること、そこにアイスキュロスのプロメテウスが原初と結びつけられる一つの根拠を見出しうるであろう。

断章 219 に戻ろう。続く対句によれば、原初は、世界の性起と組み合わされる。周知のように、ヘルダーリンの詩句から取り出された「性起の出来事 (Ereignis)」の語は『哲学への寄与論稿』でのキーワードとなるが、それより早く、「世界の性起」という表現で用いられているのは注目すべきである。原初とは、有がその真理において、ギリシア的なアレーティアにおいて立ち現われた時である。それは世界が世界として開かれた決定的な時であるから、両者の結びつきは明らかである。そして、世界の性起は、人間的現有を必要とする。人間が世界内存在であるかぎり、人間がその内で現に有る世界の出来事は、本質的に人間存在を含んで成り立つ。人間が有に開かれて世界が世界となるどころ、歴史が生起する。「黒ノート」には「有の生起 (Seinsgeschehnis)」(GA94,6, usw.) という表現が用いられており、「現有の歴史」もここから捉えられると思われる。それはまた、「世界の生起 (Weltgeschehnis)」(GA94,94)、つまり世界の歴史と別ではない。肝心なことは、そのような有ないし世界の生起としての歴史に、有の本質歪曲が結びついていることである。本質が何ら実体的な性質でなく、本質を現わし本質と成るという意味での「本質現成 (Wesung)」として捉えられるかぎり、本質はそれ自体が歪曲との可能的な連関の内に立つ。したがってこの断章は、歪曲を可能的に含む本質、そのような本質を持つ有の生起が原初において世界の性起になったことを語っているであろう。それは、歴史的に一回的な性起そのものが「脱 (ent-)」「非 (un-)」「反 (gegen-)」等の否定性を含むと見なされることである。そして、このことこそ、この時期から有の問いの展開で中心に置かれる「有の真理」ないし「真理の本質」との連関を示している。と言うのも、真理をギリシア語の「アレーティア」に遡って理解しようとするハイデガーにおいて、レーテーつまり覆蔵から覆いが奪い取られる動かないしその状態としてのアレーティア、つまり非覆蔵性としての真

理解は、まさにギリシアの原初の世界経験として取り出されたものに他ならないからである。

それでは、そのような世界の性起から有の本質歪曲までの全体がプロメテウスとどのように関係するのであろうか。「黒ノート」には、それを直接に語る断章は見出せない。そこで、プロメテウス理解をより明らかにするため、1930年代に記された二つのテキストを取り上げることにする。一つは、上で触れた「自己主張」であり、もう一つは覚書き『省慮』である。

## 2. 知（学問）と運命 — 「自己主張」における

ハイデガーによれば、「ドイツの大学の自己主張とは、その本質への根源的で共通の意志」（GA16, 108）であり、その意志は、「ドイツ民族の歴史的精神的使命への意志として、学問への意志」（*ibid.*）である。学問とドイツの運命は、この本質意志において結びつき、力とならなければならない。それは、教員集団と学生集団から成る「われわれ」が、一方では学問の本質をその最内奥の必然性に曝し、他方ではドイツの運命をその究極の窮迫において耐え抜く場合のみ、可能となる。

そこでハイデガーは、学問の本質を問うに際し、学問がそもそも存在すべき条件を求めて、西洋的学問の原初、つまりギリシアにおける哲学の始まりに立ち帰る。そこにおいて西洋の人間は初めて全体における有るものに直面し、有るものをまさに有るものとして問うた。それ以来、すべての学問は、知ろうが知るまいが、欲しようが欲すまいが、哲学の原初に繋がれている。こうして、「学問の根源的なギリシア的本質の二つの際立った特性をわれわれの現有に再獲得する」（GA16, 109）ことを欲してハイデガーの引いてくるのが、『縛られたプロメテウス』の一文に他ならない。「ギリシア人のもとでは、プロメテウスが最初の哲学者〔知者〕であるとする古い言い伝えが広まっていた」（*ibid.*）<sup>7</sup>という断わり書きは、上記「黒ノート」での言及、つまりプロメテウスと哲学の原初との関係に重なっている。もっとも、ここで原初として引かれてくるのが、なぜ他の三者の思索者でなくアイスキュロスのプロメテウスなのかということとは問題になるが、まずはその内実から検討しよう。

ハイデガーが「知の本質を語り出す箴言」（*ibid.*）と記すプロメテウスの言葉（Prom. 514）、日本語訳の一つでは「手練の技も必然にくらべれば遥かに無力なのだ」<sup>8</sup>と訳されるものを、ハイデガーは「知はしかし、必然よりも遥かに無力なのだ」（*ibid.*）と訳す。そして言い換えて、「事物をめぐるいかなる知も、運命の圧倒的力に前もって引き渡されたままであり、それを前にしては言葉を失う」（*ibid.*）と記す。これが一つ目の特性だが、アイスキュロスがプロメテウスに語らせた言葉だけなら、そこまでである。それは、技術の力がどれだけ大きくても必然に打ち勝つことはできないのだという、技術知の限界についての洞察とも理解されよう。

ただし、プロメテウスの語をハイデガーが「知と運命」という対比で受け止めていることに注意したい。テクネーが知と訳され、必然が運命と言い換えられるとき、この言い換えが、冒頭で語られた学問とドイツ民族の運命との対比に重ね合わされているのは明らかである。そのうえでハイデガーは、知のギリシア的本質の二つ目の特性を取り出す。すなわち、「それだからこそ知は、最高の抵抗を展開しなければならない。この抵抗に対して初めて有るものの覆蔵性の威力が丸ごと立ち現われ、実際に言葉を失うことになる。そのようにしてまさしく有るものは、その究め難い不変性において開かれ、知に真理を貸し与えるのだ」（*ibid.*）。

この第二の特性をどのように受け止めるべきか。それは、プロメテウスの言葉の中で直接に

は語り出されていない。しかし、運命に対する自らの無力を語る時、その知は既に運命との関係を自覚している。ここでハイデガーは、ギリシア的知として純粋な理論知と見なされるテオリアーを引き合いに出す。ただしハイデガーによれば、テオリアーとは元来、それ自身のために生起するものではなく、有るものそのものの近くでその差し迫りのもとに留まろうとする情熱の中で生起するものであり、それはまた、エネルゲイア、つまり「活動していること（作品〔仕事〕に携わってあること）(Am-Werke-Sein)」の最高様態であった。この理解の背景には、エネルゲイアの中にエルゴンを見て取り、「作品」への着目を強めていくこの時期の姿勢が認められるが、そこに制作知テクネーとの連関を見出そうとしているのは明らかである。

こうしてハイデガーは、「学問の原初の本質」を規定する。すなわち、「学問とは、常に自らを覆蔽しつつある全体における有るものただなかで、間いつつ堪え抜くことである。その際、この行為しつつ持ち堪えることは、運命に対する己れの無力を知っている」(GA16, 110)。

「運命に対する無力」を自覚する知こそが、ギリシアの原初を特徴づける。しかし、原初に始まった西洋の学問も、その後の歴史の中で、まずは「キリスト教的 - 神学的世界解釈」によって、次いで「近代の数学的 - 技術的思惟」によって、時間的にも事象的にも原初から遠ざかってしまった。しかし、原初は、決して過ぎ去ったのではなく、なおわれわれの前に立っている。それは、「その偉大さを再び取り戻すようにという遥かな〔接合の〕指図として存している」(ibid.)。先に触れたように、ハイデガーは「遥かな〔接合の〕指図 (die ferne Verfügung)」という「黒ノート」で繰り返される言葉を使いながら<sup>9</sup>、「われわれが原初の偉大さを獲得し戻すために、この遥かな〔接合の〕指図に決断的に自らを接合する (fügen) 時にのみ、われわれにとって学問は現有の最内奥の必然性になる」(GA16, 110-111) と述べる。

ハイデガーによれば、このような学問の本質への意志は、決断的なものとして、知における創造的なものである。しかし、その創造的なものは同時に、「運命に対する無力」でもある。学問の本質への意志は、そのようにして自らの運命を経験する。学問の原初の本質に立ち帰ることは、原初において経験された「運命に対する知の無力」を受け止めることである。プロメテウスの言葉は、まさにそのように聞き取られた。そもそも知がプロメテウスによって人間に授けられたとするモチーフの中に、知の運命性が語り出されている。

この知における本質的な無力を現代において経験することが肝心である。それは諸学問の課題であるべきだが、当時の専門化し技術化した諸学問にそのことを求めることはできない。しかしドイツの大学の本質に対する意志は、知がそのように無力化した事態そのものを、現代における知および学問の運命として受け止めなければならない。それはドイツ民族に負わされた運命であるが、ただし二重の意味において、つまり歴史的現実として負わされているということと、その対処と克服が精神的使命として課せられているという、二重の意味での運命である。

ここには、『有と時』において現有の本来的歴史性として取り出された「運命」を超えた内実が含まれていると思われる。『有と時』で最も重要な主題の一つである「歴史」について、「運命」概念こそは、現有の歴史性と存在論の歴史の破壊を繋ぐ要であり、それは「共同体、民族の生起」(SZ 384) として語られながら未展開に終わった「歴史的運命 (Geschick)」とともに、1930年代以降のハイデガーの思索を導いていく。この就任演説で、民族と国家について運命や歴史的運命が語られるのは、まさにその課題の遂行であろう。周知のように、ハイデガーは既に『有と時』で、同時代的な「諸学問の危機」を受け止め、その後も著作や講義で哲学と諸学

問のあり方を繰り返し問うていった。今や哲学者の学長として、知の変化や窮迫を指摘し、学部や学科で専門化と技術化の進む大学の終焉を洞察しつつ、ドイツの運命をその究極の窮迫において耐え抜こうとするのである。

ところで、このように知の無力化が問題化するとき、改めて注目すべきは、「知」の原語がテクネーであったことである。このことは、就任演説を含め、30年代に顕著になるハイデガーの基本的立場である。たとえば、「自己主張」から二年後、ソポクレス解釈を展開した35年夏学期講義「形而上学入門」でも、テクネーは芸術でも技術でもなく「知」であると言われる（GA40,19,168.）。ただし、プロメテウスに触れた断章が示すように、原初が有の本質歪曲と関連づけられるかぎり、それは既に、原初が原初性を失い終焉に向かう方向を含んでいることを示す。それに応じて原初の知テクネーも、変貌を避けられない。その変貌が、この時期以降、技術の本質を特徴づける「工作機構（Machenschaft）」として現われてくるのである。

### 3. 火とテクネーと真理 — 『省慮』における

われわれは、1938-39年に書き記された覚書き『省慮』に向かうことにする。『哲学への寄与論稿』に続くこのテキストは、それを補足かつ展開する内容に満ちている。『省慮』においてプロメテウスに触れられるのは、冒頭の序言と第51節「有（<sup>あり</sup>Seyn）と人間」であるが、今は、主題の連関上、後者に則ることとする。少し長いが、肝心な部分を引用したい。

「有が原初においてピュシスとして言葉になったとすれば、そしてピュシスとパオスが同じことをその多様性において言っているとすれば、つまり、開くことと燃え上がることの二重の言示のうちで立ち上りつつ空け透くこと（*aufgehende Lichtung*）を言っているとすれば、人間を、ロゴスを持つ生きものとする原初の形而上学的経験は同時に、人間を、灼熱つまり火を「持つ」存在 — 「火」を作ることのできる唯一の存在 — とする経験を所有するのである。そうであるなら、「火」は燃焼と明るさとしてテクネー（第63節「技術」を参照）の一手段であるのみならず、空け透き — アレーティアとして、テクネーの本質根拠である。そうであるなら、プロメテウスは、人間に初めて「火」を付加物としてもたらしたのではない。そうではなく、新しき神々に対する古き神であるティタン神のこの行為によって、人間は初めて人間となったのであり、そうであるなら、原初以来、人間の歴史と、空け透きの根拠喪失性としての工作機構の可能性が、テクネーの内で決定されるのである」（GA66,135）。

ギリシア語の「パオス／ポース（光）」は『有と時』の時期から現象学の「パイノメノン（現象）」と結びつけられていたが（Vgl. SZ 28）、ここでは、その語が原初において経験された有、つまりピュシスと関連づけられる<sup>10</sup>。そして両者の関連を空け透きとしての真理に認め、しかもその真理から「火」を理解する。火はテクネーの本質根拠である。繰り返すなら、火と技術を初めて結びつけたのはアイスキュロスであった。火の使用から様々な生活のための技術知を生み出したとするのがアイスキュロスのプロメテウス理解であるなら、その洞察を、ハイデガーは自らの立場から、上記のように真理と知の関係として受け止める。この断章で参照されている第63節「技術」の書き出しが、「技術の本質空間の発見が最も成功するのは、われわれがテクネーは「知」を表わす一つの語であるとする場合、そして「知」を真理のうち立つこととして把握し、そして真理を有の空け透きから有るものの開性として理解する場合である」

(GA66,173) となっているのは、そのことを示すであろう。1930年代初頭からプラトンの洞窟の比喩やパルメニデスの教訓詩に取り組みながら真理の本質への問いを掘り下げていくハイデガーにとって、アレーティアとしての真理は、それ自体のうちに覆蔽つまり非真理を本質的に含むのであり、さらにそれが「迷い (Irre)」として受け止められるようになる。ついでに言えば、『オイディプス王』を存在と真理と仮象の動性から捉え、そこに「迷い」を洞察する視点も、この同じ真理理解のうちに立っているのである<sup>11</sup>。

以上のように受け止めるなら、最初に取り上げた「黒ノート」の断章との対応も明らかであろう。空け透きとしての真理は、原初におけるピュシスとパオスの経験である。それは、プロメテウスを介して神と人間が応対し (entgegenen)、天上の火が技術知とともに大地にもたらされ、世界が開かれたことである。人間が初めて人間になると言われるのは、人間が真理の内に立って現有となることを意味する。それは、人間的現有の歴史の始まりでもある。そして、断章において「有の本質歪曲」と結びつけられていた歴史が、ここでは、「空け透きの根拠喪失性としての工作機構」と関連づけられていることがわかる。しかし、既に見たように、プロメテウスの行為が、神と人間との接合の正当さを踏み越えた不正当さであるとすれば、それは原初の知テクネーそのものに、原初からの離反が本質的に含まれていることを示すことになる。

知としてのテクネーが直ちに工作機構なのではない。ただし、真理が原初の本質の内に覆蔽としての非真理を含むかぎり、原初に発する現有の歴史は同時に、有の本質歪曲の歴史となりうる。別名「有の忘却」の歴史である。そのなかで知が有るものを、作られるものあるいは作られ得るものと受け取る時、「空け透きの根拠喪失性としての工作機構」の支配となるが、上記のように、その可能性は知に本質的に含まれている。このようにして、三つのテキストに跨がるプロメテウスへの言及は、1930年代における基本的立場において結びつくのである。

### 結 問題の射程

以上ハイデガーによるプロメテウスへの言及をテキストに即して一通り考察した今、最後に、ハイデガーにとってのプロメテウスの存在について一言付け加え、同時に問題の射程を示し、締め括りしたい。

近年公刊された覚書きや「黒ノート」を繙くとき、公刊著作との決定的な違いは、神についてのハイデガーの言及の多さである。そしてその多くの箇所では、「神／神々と人間」の関係が「間 (Zwischen)」、ないしより多くは「応対 (Entgegnung)」として語られる。「最後の神」について言われるように、ここで単数と複数の違いは重要ではない。重要なのは、神があくまで人間との関係において問題になるということである。ハイデガーは、ヘルダーリンの影響のもと、「唯一なる三者」として、ヘラクレス、ディオニュソス、キリストをまとめて名づけていた。前二者は、ギリシア神話上、神と人間の間に生まれた「半神 (Halbgott)」であり、キリストは神の子、「神人」である。これらの存在に対するハイデガーの関心には、神を常に人間との独自の関係から捉える姿勢が映っている。特にヘルダーリン第一講義で半神たちの存在を「運命」として解釈することは、「運命」理解にとっても重要である。たしかに、この観点からすれば、古きティタン神に属するプロメテウスは半神でも神人でもない。しかし、人間に火と技術知を与えてゼウスの怒りの犠牲となったプロメテウスは、神と人間との比類なき間に立ち、その間を生きることで自らの運命に従う。ハイデガーは上記ヘルダーリン講義の中でオ

イディプスを半神に重ね合わせ、その苦悩 (Leiden) を語っているが、ハイデガーはプロメテウスをも同じく半神と重ね合わせていたのではないか。いな、たとえ半神の名前を出さなくとも、神と人間との独自の「間」によって規定されるプロメテウスの存在は、ハイデガーは、その存在が原初に組み込まれて西洋の知の歴史となったことを、アイスキュロス悲劇のなかに読み取ったのである。

一方、上で触れた「自己主張」では、よく知られているように、西洋の学問に触れる文脈で、「… 情熱的に神を求めたドイツの最後の哲学者、フリードリッヒ・ニーチェが言ったこと、すなわち「神は死んだ」ということが真であるなら … 学問についてはどうなっているのだろうか」(GA16, 111) という問いが発せられる。ニヒリズムをめぐってニーチェとの本格的な対決が始まるのはこの直後からであるが、いずれにしても、情熱的に神を求めたニーチェが「神は死んだ」と語ったことの意味は重い。それは、神との関わりを常に含みながら展開した西洋の歴史にとって、一つの終わりを意味するからである。

西洋の知の歴史において、原初におけるアイスキュロスのプロメテウス、そこには既に終焉に向かう方向が可能的に含まれていたのであるが、その原初に対し、キリスト教の神の死を語ることで原初の歴史に終わりを示したニーチェは、しかし別の神ディオニュソスを求めていった。そのニーチェから、「没落 (Untergang)」が「移行 (Übergang)」と一つであるモチーフを受け止めたハイデガーは、「黒ノート」や『省慮』で、有の歴史を原初からの「没落」と捉え、しかも原初そのものを没落の根拠と捉え、有の本質あるいは有そのものについて「悲劇的」と語るようになる (Vgl. GA66,233-234, GA95,417-418)。ただしその歩みは、別の原初への「移行」と一つである。その背景には、明らかにギリシア悲劇に対する洞察があった<sup>12</sup>。ギリシア悲劇は、ハイデガーが自らの立場を深めていく上での紛れもない思想的源泉である (了)。

---

#### 注

ハイデガーからの引用は、『有と時 (Sein und Zeit)』のみ、SZ の略号とともにニーマイヤー版の頁数を、それ以外のはクロスターマンの全集版に則り、GA の略号とともに巻数と頁数をカンマで区切って、いずれも引用文の後に括弧に入れて記すものとする。本文中のイタリック体は、傍点で示している。

<sup>1</sup> 時期だけに着目するなら、既に 1919 年、戦時期緊急学期講義「哲学の理念と世界観問題」に、日の出の描写の例として、ソポクレス『アンティゴネー』の詩句が引かれている。Vgl. GA56/57, 74.

<sup>2</sup> ハイデガーのソポクレス解釈を主題にしたものとして、以下のものがある。Otto Pöggeler, *Schicksal und Geschichte, Antigone im Spiegel der Deutungen und Gestaltungen seit Hegel und Hölderlin*, Wilhelm Fink Verlag, 2004., Vladimir Vukicevic, *Sophokles und Heidegger*, Verlag J. B. Metzler, 2003. また、以下の拙論を参照されたい。秋富克哉「オイディプスの一つ多過ぎた眼 — ハイデッガーのソポクレス解釈」、日独文化研究所編『文明と哲学』第 4 号、2012 年、86-101 頁。同「『アンティゴネー』の合唱歌をめぐる一試論 — ハイデッガーのソポクレス解釈 (2)」、日独文化研究所編『文明と哲学』第 5 号、2013 年、120-135 頁。同「ハイデッガーとギリシア悲劇 — ソポクレス解釈をめぐって」、関西哲学会編『アルケー』、No. 23、2015 年、41-54 頁。



3 ハイデガーは、1924年度の講義で、プラトンやアリストテのテキストからの引用で「デイノン」という語に触れるが、その際は「恐れ」を軸とした訳語 (fürchterlich, Furcht, furchtbar) を用いている。Vgl. GA18, 256, 259. GA19, 343, 464, 482, etc.

一方、ほぼ同時期、『有と時 [存在と時間]』を準備していく過程で、「不安」の分析に「無気味さ (Unheimlichkeit)」を取り上げるようになるが、「デイノン」を「無気味な」の語で訳すようになるのは、1931/32年の冬学期講義「真理の本質について — プラトンの洞窟の比喩とテアイテトス」辺りかと思われる。そこで主題となるのは、プラトンの洞窟の譬喩であるが、「デイノン」を「何か無気味で恐ろしいもの (etwas Unheimliches und Fürchterliches)」(GA34,170)と記している。またこの講義の中では、後に詳細に扱うことになるソポクレスの『アンティゴネー』の合唱歌 (人間讃歌) の冒頭の部分を、「無気味なものはたくさんあるが、人間よりも無気味なものは何もない」(GA 34,198)と訳している。

4 『藤澤令夫著作集 III』、岩波書店、2000年、222頁。この箇所は氏の著作『世界観と哲学の基本問題』の「第三章 技術」に当たるが、氏はそこで、アイスキュロスとプラトン『プロタゴラス』それぞれにおけるプロメテウス解釈を取り上げ、その技術理解の内実と現代的意味を検討している。

5 当該箇所について、ハイデガーの訳はその全体への完全な訳にはなっていない。『ギリシア悲劇全集 第2巻』(岩波書店、1991年)所収の伊藤照夫氏の訳を参照するなら、たとえば第9行「かかる罪過の償いを神々に果たさねばならない」については、「かかる罪過の償いを果たす」に当たる部分に、「そのような過失 (迷い) に対して、正当さを与える、容認する」という語訳を当て、第30行「人間どもに不相応な恵みをさずけた」については「不相応な」に当たる部分に、「正当さを越えた」という語訳を当てている (Vgl. GA35, 211)。

6 『哲学への寄与論稿』では、「将来する者たち」と「最後の神」という独自の「人間と神」を組み込んだ、「別の原初」における有の思索空間の全体が、6つの「接合肢 (Fügung)」から成る「接合組成 (Gefüge)」と構想されることになる。第一の原初においてプロメテウスの行為を介した「人間と神」が、Fug, Fügeの連関で捉えられていることは、2つの原初の間に対応として受け取られ得る。

7 この古い言い伝えが具体的に何を指すのかを、ハイデガーは述べていない。ただ、考えられる有力な可能性の一つとして、ハイデガー自身が幾つかのテキストで触れているテオプラストスを挙げるができると思われる。以下のテキストに断片50として収められているものは、「プロメテウスは知者で、人類に初めて知を愛すること (哲学) を分け与えた。そこから、人類に火を与えたという神話も伝えられる」となっている。Theophrasti Eresii opera, quae supersunt Omnia : graeca recensuit latine interpretatus est, indices rerum et verbum absolutissimos adjecit Fredericus Wimmer, ed. Firmin-Didot, 1931.

テオプラストスの断片の所在をご教示下さった京都大学名誉教授中務哲郎先生に、この場をお借りして、心より感謝申し上げたい。

8 『ギリシア悲劇全集 第2巻』、岩波書店、1991年、36頁。

9 Vgl. GA94, 54, 87, 89, usw..

10 1935年の夏学期講義「形而上学入門」では、ピュシスの語を考察する文脈のもと、当時の言語学研究に触れ、最近ピュシスの「ピュ」という語根がパイネスタイの「プファ」とが連関づけられていると述べ、『比較言語研究』(Zeitschrift für vergl. Sprachforschung. Bd. 59)を挙げている (Vgl. GA40, 76)。これは、該当の号掲載の次の論考であると考えられる。F. Specht, Beiträge zur griechischen Grammatik, Göttingen/ Vandenhoeck & Ruprecht, 1932.

11 注2の拙論「オイディプスの一つ多過ぎた眼 — ハイデッガーのソポクレス解釈」を参照されたい。

---

12 ハイデガーは『省慮』の第 69 節で、「偉大な — 本質的な — 詩作は、有<sup>あり</sup> (Seyn) の創設として、「悲劇的」である」(GA66,223) と記しながら、すぐ後では、「おそらくこれまでの「悲劇的詩作」は、西洋の形而上学に属することに依じて有るものを詩作しており、有<sup>あり</sup>を間接的にしか詩作していないがゆえに、前庭 (Vorhof) に過ぎないであろう」(ibid.) としている。ここでは、ギリシア悲劇もハイデガー自身の立場からあくまで第一の原初に押し込められているが、詩作との連関における「悲劇」そのものの位置づけについては、いっそう広い文脈から検討される必要があるであろう。